

# 痴呆性高齢者のグループホームケアの効果に関する研究 －利用者の生活上のニーズに焦点をあてて－

奥山真由美・岡田ゆみ・渡辺文子\*

**要旨** 本研究は、グループホームで生活している痴呆性高齢者の生活上のニーズを明らかにし、グループホームケアの効果および課題について検討することを目的とした。研究方法は、グループホームに入居している痴呆性高齢者7名に対し、参加観察と聞き取りにより、行動や語られた内容から生活上のニーズを抽出し、内容分析の手法に基づき質的機能的に分析した。その結果、生活上のニーズとして、【基本的な日常生活行動の維持に対する欲求】、【安全、安心で心地よい居場所への欲求】、【社会との繋がりへの欲求】、【家族への帰属と愛情の欲求】、【スタッフとの関わりに対する欲求】、【対人交流の欲求】、【生活共同者としての仲間との関係維持の欲求】の7つの概念が創出された。以上の結果から痴呆性高齢者のグループホームにおけるケアの効果と課題について検討した。

**キーワード：**グループホーム 痴呆性高齢者 日常生活 ニーズ

## I. はじめに

グループホーム（以下GH）の生活環境やケアが痴呆性高齢者の行動にどのような影響を及ぼしているかを検討することを目的に、平成11年度から13年度にかけて、利用者の行動特性の変化を参加観察法により明らかにした<sup>1)2)</sup>。その結果、GHケアは、利用者の精神的な安定やその人らしさの保持に有効であることがわかった。

今までは、ケアの効果を利用者の行動特性から客観的に評価をしてきた。しかし、参加観察を行うなかで、利用者自身からGHでの生活やケアについての発言を得る機会も多くあり、軽度～中等度の痴呆性高齢者は主観的な評価が可能であると思われた。GHケアの効果に関する先行研究では、利用者のADLや認知機能の変化<sup>3)4)</sup>、痴呆症状の頻度に関する研究<sup>5)</sup>など、高齢者の認知・機能面からケアの質を評価した報告や、GHの生活環境の面から検討した報告<sup>6)～8)</sup>が多く、利用者の主観的な評価から検討した研究は少ない。

そこで本研究では、個々の利用者がGHでの生活をどのように捉えているか、生活に対するニーズは何かということを明らかにし、利用者の主観的

な側面からGHケアの効果について検討した。

## II. 研究目的

GHで生活する痴呆性高齢者の生活上のニーズを明らかにし、GHケアの効果および課題について検討する。

## III. 用語の定義

### 1. ニード(need)

expressed felt need<sup>9)</sup>を指す。felt needは、個々人自らが自覚するニード（欲求）であり、各人が自分の現在の状態とこうありたいと願う状態との間の乖離について持つ主観的な感情である。expressed felt needは、表明された felt needである。

## IV. 方法

### 1. 対象

A市内のBGHの全利用者9名のうち、利用1ヶ月以内の者1名と重度痴呆により主観的な評価を行うことが不可能と考えられた1名を除く7名を対象とした。対象者の概要を表1に示す。

表1 対象者の概要

性別	女性	7名
平均年齢	84.5歳	
痴呆度	軽度～中等度	7名
ADL	一部介助または自立	7名

## 2. データ収集期間

平成15年7月27日～9月7日

## 3. 方法

### 1) 利用者のニーズを把握するための方法の検討

GHで生活している痴呆性高齢者は、主として痴呆度が軽度～中等度であり、B-GHにおいても同様であった。柄澤<sup>10)</sup>によると、軽度痴呆では、日常会話や意思疎通はほぼ普通にできるが、話題に乏しく限られていたり、同じことを繰り返して話すなどの症状がみられ、中等度では、簡単な日常会話は可能だが意思疎通は不十分で時間がかかるという状態を呈する。したがって、通常のインタビュー法では、面接という時間的、空間的、人間関係的な通常とは異なる状況への不安や混乱、病状から考えられる長時間にわたる質問への回答困難などが予測された。そこで、行動として表出されるニーズを把握するために、利用者の生活に参加して個々の利用者の行動を観察するとともに、GHの生活空間のなかで共に語らい、そのなかで生活をどのように捉えているか、生活に対するニーズは何かということについて聞き取りを行うことに決定した。

### 2) 聞き取り内容の検討

GHの生活に対する利用者の捉えやニーズを知るために半構成的質問紙を作成した。平成14年から痴呆性高齢者のGHの事業者に最低年1回の自主評価が義務付けられ、「運営理念」、「生活空間づくり」、「ケアサービス」、「運営体制」の4分野115項目を「できている」、「要改善」の2段階で評価した結果を県に報告するようになった。今回私たちは、その自主評価の項目のうち、「生活空間づくり」と「ケアサービス」について利用者自身が評価できると思われる項目を選択し、それ

を参考にして独自に質問紙を作成した。質問紙の内容を表2に示す。

### 3) データ収集方法

研究者2名ずつが週1回、午後1時30分から3時30分までの2時間GHを訪問した。研究者は訪問者として利用者のスケジュールのなかに自然に参加し、利用者と生活をともにしながら、そのなかでの会話から質問紙の内容について聞き取りを行った。研究者は7名の利用者を3～4名ずつ分担し、参加観察および聞き取りの内容をフィールドノートに記録した。フィールドノートは翌日研究者全員が目を通した後、意見交換を行った。新しいデータの出現がなく飽和に達したと判断した時点で参加観察を終了し、計7日間訪問した。

### 4) 分析方法

データの分析は内容分析の手法を用いた。フィールドノートより利用者の生活上のニーズの部分を取り出し、1つの文章が1つの意味を示すように区切りコード化した。各コードの類似性、相違性により分離・統合し、サブカテゴリー、カテゴリーの順に抽出し命名した。

内容分析に関しては、妥当性を確保するために、老年看護の経験のある研究者3名で検討を加えながら分析を行った。また、GHのケアスタッフとの意見交換を行い、結果についての再検討を行った。

### 5) 倫理的配慮

GH責任者に研究協力依頼状を提出した。その際、研究目的と参加観察の方法、対象者擁護の方法を明記し協力を依頼した。さらに、7名の対象者に対しては、訪問時の説明で研究の主旨や方法、対象者擁護の方法を理解できると判断したため、毎回の訪問時に同意を得た上で参加観察を行った。また、データの取り扱いについては研究者間で話し合い、全体での集計は行うが、個人名や施設名を挙げての情報公開は行わないこと、決して個人に迷惑のかからないよう調査内容に対するプライバシーの保証について徹底することを確認した。

表2 質問紙の内容

	具体的な質問内容
生活空間、環境について	1. ここではどのような生活を送っていらっしゃいますか。 2. ここでの生活についてあなたの気持ちをお聞かせください。 3. ここの住み心地はいかがですか。
グループホームでの暮らしの支援について	4. 職員の方はどうですか。どんなふうに感じていらっしゃいますか。 5. 職員の方に希望することはありますか。 6. 仲良くしていらっしゃる方はいますか。 7. ご家族の方は会いにいらっしゃいますか。帰られることはありますか。 8. 外出して外の方たちとお話する機会がありますか。 9. お体の具合はどうですか。 10. 何か心配事はありませんか。 11. 楽しいと思うことや嬉しいと思うことがありますか。それはどんなときですか。 12. 何かやりたいことはありますか。 13. これからどのようにしたいと思えますか。 14. 最期までここで生活したいと考えていますか。それは何故ですか。

## V. 結果

分析の結果、総コード数は224コードであり、22サブカテゴリー、7カテゴリーが抽出された。

GH利用者の生活上のニーズとして、【基本的な日常生活行動の維持に対する欲求】、【安全、安心で心地よい居場所への欲求】、【社会との繋がりへの欲求】、【家族への帰属と愛情の欲求】、【スタッフとの関わりに対する欲求】、【対人交流の欲求】、【生活共同者としての仲間との関係維持の欲求】の7つの概念が創出された(表3)。

### 1) 【基本的な日常生活行動の維持に対する欲求】

利用者個人が日常生活を送るために必要な、食事、排泄、着脱衣、入浴、移動などの基本的な行動に関する欲求を【基本的な日常生活行動の維持に対する欲求】と命名した。このカテゴリーは、30コード、4サブカテゴリーから構成された。以下にサブカテゴリーとコード数および典型例を示す。

(1) 歩行機能の維持に対する欲求(14)：足が弱って歩けなくなった、上手く歩けないなど

(2) 食の満足(8)：野菜中心の食事がいい、ご飯がおいしいなど

(3) 活動・休息に対する自由さの満足(6)：何時に寝てもいいし自由なところがいいです、思いついたときに何でもできる場所ですなど

(4) 保清の満足(2)：毎日入浴できる、毎日お風呂に入っていて満足だ

### 2) 【安全、安心で心地よい居場所への欲求】

利用者がGHでの生活を安全に、かつ安心して暮らせ、しかも個人にとって居心地のよい生活の場として求めている欲求を【安全、安心で心地よい居場所への欲求】と命名した。このカテゴリーは、33コード、3サブカテゴリーから構成された。以下にサブカテゴリーとコード数および典型例を示す。

(5) 居心地のよさに対する満足(18)：本当にいいところ、一人で気兼ねがないなど

(6) 場の不安(11)：ずっとここにいるわけにはいきません、いつ帰れるのか、さあそろそろ帰ろうかしらなど

(7) GH居住の不本意さ(4)：ここ以外に帰る家がない、住んでいた家を嫁に取り壊されて帰れなくなったなど

表3 GH利用者の生活上のニーズ

総コード数 224

カテゴリー (コード数)	サブカテゴリー (コード数)
1. 基本的な日常生活行動の維持に対する欲求(30)	1) 歩行機能の維持に対する欲求(14) 2) 食の満足(8) 3) 活動・休息に対する自由さの満足(6) 4) 保清の満足(2)
2. 安全、安心で心地よい居場所への欲求(33)	5) 居心地のよさに対する満足(18) 6) 場の不安(11) 7) GH居住の不本意さ(4)
3. 社会との繋がりへの欲求(22)	8) 外出願望(16) 9) 外出の満足(6)
4. 家族への帰属と愛情の欲求(48)	10) 家族との関係維持(30) 11) 亡くなった家族との関係維持(8) 12) 帰宅願望(6) 13) 自分で出来ないことの代行の欲求(4)
5. スタッフとの関わりに対する欲求(42)	14) 援助への感謝(17) 15) 安心できて遠慮のない関係への願望(9) 16) 生活のパートナーとしての関係の保持(9) 17) 依存の欲求(5) 18) 承認の欲求(2)
6. 対人交流の欲求(24)	19) 訪問者への接待願望(15) 20) 訪問者への親和欲求(9)
7. 共同生活者としての仲間との関係維持の欲求(25)	21) 共同生活者としての親しい関係の維持(19) 22) 共助の維持(6)

### 3) 【社会との繋がりへの欲求】

地域社会との交流を求めている欲求を【社会との繋がりへの欲求】と命名した。このカテゴリーは、22コード、2サブカテゴリーから構成された。以下にサブカテゴリーとコード数および典型例を示す。

(8)外出願望(16)：銀行に連れて行って欲しい、おじいさんのお墓参りに行きたい、知人に会いたい、大阪に行きたいなど

(9)外出の満足(6)：ドライブに連れて行ってもらえるので嬉しい、散歩が良かった、週1回の買い物を楽しみなど

### 4) 【家族への帰属と愛情の欲求】

利用者がGHで生活しながらも、家族の一員でありたいと願い、家族に対して強い愛情を求めている欲求を【家族への帰属と愛情の欲求】と命名した。

このカテゴリーは、48コード、4サブカテゴリーから構成された。以下にサブカテゴリーとコード数および典型例を示す。

(10)家族との関係維持(30)：家族が来てくれない、もっと来て欲しい、家族は来てもすぐに帰ってしまう、家族が良く来てくれる、弟に会いたいなど

(11)亡くなった家族との関係維持(8)：主人に生きていて欲しかった、主人が死んだ(泣く)など

(12)帰宅願望(6)：家に帰りたい、帰るところはないけど帰りたいなど

(13)自分で出来ないことの代行の欲求(4)：田んぼの仕事をしたい、我が家の草取りをしたいなど

### 5) 【スタッフとの関わりに対する欲求】

スタッフからの援助やスタッフとの関係性に関



する欲求を【スタッフとの関わりに対する欲求】と命名した。このカテゴリーは、42コード、5サブカテゴリーから構成された。

以下にサブカテゴリーとコード数および典型例を示す。

(14) 援助への感謝(17)：よくしてくれる、ありがたい、助かる、血圧を測ってもらい感謝するなど

(15) 安心できて遠慮のない関係への願望(9)：世話をしてもらってるから何も言えない、足が悪いのでいろいろしてもらって悪いと思うなど

(16) 生活のパートナーとしての関係の保持(9)：家事を共に行う、特別何かをしてもらってはいないなど

(17) 依存の欲求(5)：食事ばかり作っていてはいけないと思う、散歩に連れて行って欲しい、ときには一緒に歌って欲しいなど

(18) 承認の欲求(2)：お風呂に入って良いと声をかけてくれない、帰りたいときに引き止めないで欲しいなど

#### 6) 【対人交流の欲求】

訪問者など外部者との交流を求めている欲求を【対人交流の欲求】と命名した。このカテゴリーは、24コード、2サブカテゴリーから構成された。以下にサブカテゴリーとコード数および典型例を示す。

(19) 訪問者への接待願望(15)：お茶やお菓子を出してあげたいけどできなくてすいません、訪問者を接待する（お菓子をくれるなど）など

(20) 訪問者への親和欲求(9)：話した内容を口止めする、訪問者の家族へ関心を示すなど

#### 7) 【共同生活者としての仲間との関係維持の欲求】

GHで共に生活している仲間と親しい関係を維持したいという欲求を【共同生活者としての仲間との関係維持の欲求】と命名した。このカテゴリーは、25コード、2サブカテゴリーから構成された。以下にサブカテゴリーとコード数および典型例を示す。

(21) 共同生活者としての親しい関係の維持(19)：皆仲良くしなくてはと思う、仲の良い人がいる、皆仲良しよなど

(22) 共助の維持(6)：仲間におやつの声をかけて呼ぶ、仲間の洗濯物をたたんで仕分けるなど

## VI. 考察

本研究により、GH利用者における7つの生活上のニーズが明確化された。ここでは、以下の3点について検討した。まず第1に、B-GHで実施されているケアと利用者の生活上のニーズとの関連から、GHケアの効果および課題について各カテゴリーごとに検討した。次に、本研究結果から創出された概念間の関連について検討を行った。さらに、欲求の次元から生涯発達を捉えた理論に、マズローの欲求理論（ニーズ理論）<sup>11)</sup>があり、これは人間の欲求には自己実現を頂点とする階層構造があるとし、人間の発達におけるニーズを5段階に分類している。そこで最後に、利用者の7つの生活上のニーズをマズローの欲求の5段階に当てはめ、ニーズの充足状況について検討した。

### 1. 実施されているケアと利用者のニーズの関連からみたGHケアの効果および課題について

#### 1) 【基本的な日常生活行動の維持に対する欲求】

GH利用者は、衣・食・住に対する基本的な欲求はほぼ満たされているが、それらの日常生活を支える基本動作、特に歩行機能を維持したいと願っていることがわかった。我々は、GH利用者の行動特性に関する研究から、利用者の下肢の筋力低下による身体機能の維持、向上のためのケア介入の必要性を認識し、昨年B-GH利用者に対する運動介入を行いその有効性を検討した<sup>12)</sup>。その結果、利用者の潜在的な運動能力や興味、関心、意欲や集中力が確認された。現在、GH利用者は、介護保険制度の影響からくる経済的な理由でデイケアを利用することができない。そのため、ADLの維持、向上に関するケアはスタッフに委ねられている。運動プログラム導入については、必要ないという報告<sup>13)</sup>がある反面、GHモデル事業でのデイケア利用の有効性<sup>14)</sup>、グループ活動の導入が心身機能の維持に有効であったという報告<sup>15)</sup>がある。B-GHでは、運動プログラムの導入は行われていないが、利用者が自らの身体機能、特に歩行機能を維持したいと考えていることが明確化された。GHケアは介護保険サービスのなかに位置づけられている。そのため、心身機能の維持、向上のためのケアの実施はGHスタッフの責務であると考え、身体機能

の維持・向上のためのケアを実施していくべきであると考えられる。

## 2) 【安全、安心で心地よい居場所への欲求】

GHという生活の場に対して、居心地のよさに満足している利用者が多い半面、家庭の事情で居住しなければならなくなったことを不本意に思ったり、場に対する不安を表出する利用者もいた。このことは、どれだけ居心地のよい空間や場が設けられていても、GHを利用する過程のなかで納得して入居していない高齢者の場合には、GHが本心から安心して過ごせる居場所ではないという思いを持っているのではないかと考える。また、痴呆に伴う状況や場への認知機能の低下から場の不安が生じているとも考えられる。そのため、利用者が混乱を起こさないよう環境面への配慮を行ったり、不安や混乱のある場合には、スタッフの専門的な関わりが必要であると思われる。

## 3) 【社会との繋がりへの欲求】

利用者は、ドライブや週に1回の買い物などスタッフとともにGHの外に出かけており、そのことには満足しているが、より地域社会との繋がりを求めていることがわかった。永田<sup>16)</sup>は、スタッフのみでは利用者主体の暮らしに限界があり、GHの限界を補強してくれる地域の資源を組織とスタッフが総出で開拓していく必要性を述べている。地域の多様な資源の助けを得て、利用者が普通に町で生活できるような取り組みについての報告もある<sup>17) 18)</sup>。近所の人々など身近な他者との関わりを促していくことも社会との繋がりを促進することに繋がるだろう。しかし、今回の結果から、特に満たされていないニーズとしては、「お墓参りに行きたい」、「銀行に行きたい」、「知人に会いたい」、「大阪に行きたい」などであり、これらはスタッフと家族の協力無くしては実現することが難しい内容であると思われる。後の【家族への帰属と愛情の欲求】における家族との繋がりを求める姿は、離れて生活していても家族の一員であることを実感し、社会のなかでの自己の存在の意味を見出したいと感じているように思われる。今後は、地域の人々との交流を推進するに当たり、

スタッフと家族との情報交換を密にし、利用者が家族とともに社会との関わりが持てるよう援助することで、利用者の社会参加が促進できるだけでなく、家族と利用者との繋がりをより深めることもできるのではないかとと思われる。

## 4) 【家族への帰属と愛情の欲求】

GH利用者は、家族との関係を維持したいという欲求でコード数が多かったが、家に帰りたいという欲求ではコード数が少なかった。大集団ケアの代表的な施設である老健利用者に対する調査<sup>19)</sup>では、家族との関係維持に対する欲求は強く、同時に帰宅願望も強いと報告されている。老健では、自宅とかけ離れた生活環境や他者との関係などの理由から帰宅願望が強いと思われるが、GHでは自宅に近い生活環境や他者とのなじみの関係などが安心感をもたらし、帰りたいという感情が生じにくくなっていると考えられる。あるいは、長期の利用に伴い自宅に帰ることをあきらめている利用者もいるのではないかとと思われる。今回、どの利用者も家族との繋がりを強く求めていることがわかった。今後は、面会や外出、外泊の推進や家族と利用者の関係性の維持に対するケアなど、GHケアにおいても、家族ケアのあり方を検討する必要があると思われる。

## 5) 【スタッフとの関わりに対する欲求】

利用者は、大集団施設で生活する高齢者と同様に、スタッフを”お世話してくれる人”と認識している<sup>20)</sup>が、同時に生活のパートナーとしても捉えていることがわかった。利用者は、スタッフとの関わりにおいて感謝している反面、申し訳なさやもっと依存したい、認めてもらいたいという欲求も持っていた。

GHの人員配置基準には、スタッフの中に看護職などの医療従事者を置く規定はない<sup>21)</sup>。また、利用者に対するスタッフ数は3:1の割合であり、痴呆性高齢者が暮らすGHでの健康管理や日常生活の援助を十分に行えるだけの人員が不足していると思われる。今回の結果から、スタッフが食事の支度ばかりに追われ、またレクリエーションなどの企画や実施などが十分に行われていない現状が

あることや、それらのことを不満に思っている利用者がいることがわかった。人員不足や専門的知識の不足から痴呆性高齢者の認知面や行動面を活性化することのできるようなレクリエーションやリハビリなどの企画を行うことも困難があるのではないかと考えられる。

今後は、医療専門職の配置や、老健などの併設施設で働く専門職の介入等を含め、健康管理の仕組みやより効果的な生活援助の方法を検討する必要があると考える。

## 6) 【対人交流の欲求】

利用者は訪問者に対して、親しくなりたい、接待したいという欲求を持っていた。GH利用者と老健入所者の行動特性の比較からGHケアの効果を検討した研究<sup>20)</sup>では、GH利用者、老健入所者ともに訪問者に対する接待がみられた。しかし同じ接待でも、GH利用者は、訪問者に対する出迎えや見送り、お茶を勧めるなどの行動が多く、老健入所者では、映画に誘う、写真を見せる等であり、その内容に違いがみられた。GH利用者は、自分たちをホストであると認識していると思われ、高齢者を取り巻く環境的な要因の違いが影響していると考えられる。GH利用者が、外部者との関わりを深めていくために、GHの外に出かけるだけでなく、家族や友人、地域の人々やボランティアなどGH内での外部者との交流をより促進する必要があると思われる。

## 7) 【共同生活者としての仲間との関係維持の欲求】

GH利用者は、共に生活する者として周囲の仲間たちを捉えており、お互いに助け合い、支えあって生活したいと考えていた。大集団ケアの場では多床室で生活する高齢者が多く、同室者同士は交流するどころか、むしろお互いに関わりを避けて生活していることが明らかにされている<sup>22)</sup>。その理由として外山<sup>23)</sup>は、互いに無感覚、無関心になることによって、かろうじて多床室内に自己のテリトリーを守っていると述べている。GHは全個室であり、大集団ケアのような規則もない。そして日中はリビングで共に過ごしている。そのため、個々の利用者はいつでも自己の意思で自室に戻り、プ

ライバシーが守られた空間の中で安心して過ごすことが可能であると思われる。スタッフは、利用者同士が共に語り、生活を共にしているという感覚を持てるよう、利用者同士の交流をより促進していく必要があると考える。

## 2. 創出された概念間の関連性について

利用者への質問内容は生活環境に関することや生活支援に対するものであった。創出された概念のうち、【基本的な日常生活行動の維持に対する欲求】と【安全、安心で心地よい居場所への欲求】は、質問紙の「生活空間、環境について」の項目1～3と対応し、【社会との繋がりへの欲求】から【共同生活者としての仲間との関係維持の欲求】までは質問紙の「GHでの暮らしの支援について」の項目4～14に対応すると思われる。このことから、これらの概念は、GHの生活環境、特に住み心地に関する認識とスタッフから受けている支援について、特に利用者の心身の状況やスタッフを含めた他者との関わりについての認識を中心に、生活上のニーズを明確化したものであるといえる。

カテゴリー相互の関連性については、【基本的な日常生活行動の維持に対する欲求】と【安全、安心で心地よい居場所への欲求】は、GHという生活の場に対し、特に衣・食・住に関して、より心身共に健康で快適な生活を送りたいというニーズの表出であると思われる。【社会との繋がりへの欲求】から【共同生活者としての仲間との関係維持の欲求】までのカテゴリーは、GHのなかで利用者が、健康なときに自宅で生活していたときと同様に、社会のなかでの自己の位置づけや価値を見出したり、他者と関わって暮らしたいというニーズを表出したものであると考える。在宅での生活と違う点は、利用者同士の関わりに対するニーズが表出されており、その内容から利用者同士の関係は「本当の家族」ではなく、「家族ではない他者」といかに上手く共同生活していくかということであるように思われる。

以上のことから、社会生活を営む1人の人間として生活空間を保障することや、利用者同士やスタッフ、家族、地域の人々との繋がりをより深めるための方策について、先にも述べた人的、専門

的な介入、家族との協力など他方向からの検討やケア実施の評価などを行う必要性があると考ええる。

### 3. マズローの欲求の5段階からみたGH利用者のニーズの充足度についての検討

【基本的な日常生活行動の維持に対する欲求】は、「生理的欲求」に、【安全、安心で心地よい居場所への欲求】は、「安全および安心の欲求」に属すると考える。また、【社会との繋がりへの欲求】と【家族への帰属と愛情の欲求】は、「所属と愛情の欲求」に属すると思われる。さらに、【スタッフとの関わりに対する欲求】、【対人交流の欲求】、【共同生活者としての仲間との関係維持の欲求】は、「所属と愛情の欲求」および「自尊の欲求」に属すると考える。

一般的には、発達に伴い、欲求の重要度はより下位から上位へ移っていくと考えられている。安梅<sup>24)</sup>は、エイジングにより、最終的には自己実現の欲求がもっとも重要であり、「人間は自己実現を目指す存在」とする位置づけは、生涯にわたる発達を捉える上で深い意味を持つものといえる」と述べている。今回の結果から、「生理的欲求」や「安全および安心の欲求」という人が生きる上での基本的な欲求はほぼ満たされていたといえる。しかし、その上位にある「所属と愛情の欲求」や「自尊の欲求」はまだ十分に満たされているとはいえず、利用者は、家族や社会、仲間の一員として認められたい、自己の存在価値を感じたいと思っていることがわかった。さらに特徴的だったことは、GH利用者には「自己実現の欲求」がほとんどみられなかったことである。生理的な欲求はGHの施設内で満たすことが可能であるが、より上位の欲求を満足させるためには、家族や地域社会との繋がりが必須であると考ええる。

今後は、下位のニーズを満たすために、利用者のADLの維持・向上のためのケアを検討、実施し、家族や地域社会との交流をより促進するとともに、スタッフや仲間との良好な関係づくりに努め、利用者にとって居心地の良い場所を提供する必要があると考える。また、上位のニーズとしての「自己実現の欲求」を利用者が持つことができるようにするために、個々の利用者のその人らしさを導

き出すためのケアをより具体的に実践していく必要があると思われる。

### VII. 本研究の限界

本研究は、GHで生活する痴呆性高齢者への聞き取りを中心に生活上のニーズを把握することを目的としたが、利用者の病状から通常のインタビュー法を実施することが出来なかった。また、B-GHのみで行った調査であるため、そこでのケアがニーズに反映していることが考えられる。また、本研究では利用者個々の背景を十分に吟味しながら結果の分析を行っていない。そのため、創出された概念は、対象者の個人的な心理状況や事情などが反映した結果であるともいえる。これらのことから、GHで生活している利用者の生活上のニーズを明確にできたとはいえず、結果を一般化することはできない。

今後は、フィールドを拡大するとともに、利用者の個人的な背景とニーズとの関連を検討していく必要があると思われる。そのためには、事例研究の積み重ねや、多施設を対象とした調査研究を行い、信頼性、妥当性を高めていく必要があると思われる。

### VIII. 文献

- 1) 小田真由美、神宝貴子、北園明江、渡辺文子 (2000). グループホームにおける痴呆性高齢者の行動特性、岡山県立大学保健福祉学部紀要、第7巻、41-49.
- 2) 小田真由美、神宝貴子、北園明江、渡辺文子 (2002) 痴呆性高齢者のグループホームケアの効果に関する縦断的研究－利用者の3年間の行動特性の変化から－、岡山県立大学保健福祉学部紀要9: 12-18.
- 3) Annerstedt L(1994). An attempt to determine the impact of group living care in comparison to traditional long-term care on demented elderly patients. Aging.6(5), 372-380.
- 4) Wino A, Adolfson R, Sandman P(1995). Care for demented patients in different living conditions. Effects on cognitive function, ADL-

capacity and behavior. Scand Journal Primary Health Care. 13(3)、205-210.

5) 足立啓、池本博行、赤城徹也 (1996) . 痴呆性老人のグループホームに関する研究. 大和ヘルス財団研究業績集、20、160-165.

6) 水主千鶴子 (2002) . 痴呆性高齢者グループホームの家庭的環境の実態、和歌山県立医科大学看護短期大学部紀要、5、37-43.

7) 徳田哲男、蔦末憲子、前川佳史 (2003) . グループホームにおける生活・ケア環境に関する研究、埼玉県立大学紀要、4、95-102.

8) 北川博巳、横溝光雄、前川佳史 (2002) . 痴呆性高齢者にとって安全な屋外環境に関する研究、東京都老年学会誌、9、88-92.

9) 都村敦子 (1975) . ソーシャル・ニードを把握するいくつかのアプローチについて、季刊社会保障研究、11(1)、27-40.

10) 大塚俊男、本間昭 (1991) . 高齢者のための知的機能検査の手引き、ワールドプランニング.

11) フランク・コーブル (1972) . マズローの心理学、産業能率短期大学出版部.

12) 奥山真由美、神宝貴子、北園明江、渡辺文子 (2003) . グループホームにおける痴呆性高齢者への運動介入の効果、岡山県立大学保健福祉学部紀要、10(1)、39-47.

13) 林崎光弘 (1997) . グループホームケアの理念と実践、老年精神医学雑誌、8(9)、936-942.

14) 福岡裕美子 (2000) . 痴呆性老人グループホームに求められるケア、秋田桂城短期大学紀要8、51.

15) 白井雅子、川上優、藤巻幸子 (1998) . 痴呆性老人に対する移行的グループホームケアの有用性、作業療法、17、特別号、256.

16) 永田久美子 (2002) . 利用者主体の暮らしとケアの実現にむけてー痴呆性高齢者グループホームの挑戦ー、老年社会科学、24(1)、23-29.

17) 林崎光弘 (1996) . 痴呆性老人グループホームケアの理念と技術、バオバブ社.

18) 横浜市 (2002) . 高齢者グループホーム実践報告集、横浜グループホーム連絡会.

19) 小田真由美、渡辺文子 (1999) . 老人保健施設入所者の関係性のニーズとコーピングに関する

研究、岡山県立大学保健福祉学部紀要、第6巻、21-30.

20) 小田真由美、神宝貴子、北園明江、西村美里、渡辺文子 (2001) . 痴呆性高齢者のグループホームケアの効果に関する研究ー介護老人保健施設とグループホーム利用者の行動特性の比較ー、岡山県立大学保健福祉学部紀要、第8巻、1-10.

21) 中島紀恵子、北川公子、大久保幸積 (2001) . グループホームケア、日本看護協会出版会.

22) 石田妙、外山義、三浦研 (2001) . 空間の使い方と会話特性からみた特別養護老人ホームにおける六床室の生活実態、日本建築学会大会学術講演梗概集、E、215.

23) 外山義 (2003) . 自宅でない在宅、医学書院、59.

24) 安梅勅江 (2000) . エイジングのケア科学、川島書店、22-23.

## The Effect of Care for Elderly with Dementia on Group Home —Focusing to Needs for Daily living of Elderly —

MAYUMI OKUYAMA, YUMI OKADA, FUMIKO WATANABE

Key words : group home elderly with Dementia daily living needs

Department' of Nursing, Faculty of Health and Welfare Science, Okayama Prefectural University, 111 Kuboki, Soja-shi, Okayama 719-1197, Japan